

第2回山形県文化推進委員会における主な意見等

日時：平成30年11月5日（月）15:00～17:00

場所：山形県庁1002会議室

協議テーマ：山形県文化推進基本計画(仮称)の骨子案について

〈各委員の主な意見〉

- （質問）多言語表記や無料Wi-Fi導入、バリアフリー化の推進は、県立施設に限定しているのはなぜか。
- （回答）県の計画ということもあり、出来るところからということで県立文化施設としている。市町村や民間の施設については、働きかけていきたい。
- （質問）「やまがたマナビイnet」は、当初は生涯学習の情報提供を目的として始まり、その後、文化施設やイベント情報などにも範囲を広げて運用している。生涯学習情報は非常に範囲が広く、文化情報よりも多い。生涯学習の情報が、広く文化の振興・推進につながっていくという観点からシステム全体を充実させていけばいいのか。それとも、もう少し狭義に直接的な文化情報の充実を図っていけばいいのか、方向性はどうなるのか。
- （回答）文化情報に限らず、生涯学習情報も含めて幅広く扱われていると思うので、それを生かしながら情報発信の強化を図っていければと思う。
- （質問）指標について、県立文化施設の稼働率では、文翔館ギャラリーについてはもっとあげていきたいと考えているが、文翔館ホール（議場ホール）については、貸館の施設であると同時に見学施設でもあるため、稼働率を上げれば上げるほど、見学が制限を受けてしまうなどがあり、単に稼働率を上げればいいというものではない。現状の稼働率60%ぐらいが、貸館と見学のバランスがとれた数字であるため、現状維持ということでの数値設定もあるのではないかと思う。
- 指標数値となっている「やまがたマナビイnet」へのアクセス数は、トップページへのアクセス数であり、文化情報へのアクセス数は4,700件程度とかなり低くなる。指標数値としては、文化情報へのアクセス数にしてもらいたい。
- （質問）山形県総合文化芸術館について、どのように運営されるのか、オープニングに向けて協力体制は出来ているか、県内の文化芸術団体がどの程度利用できるのか。例えば使用料や機能について、オープン前までに十分情報発信すべきではないか。お祭り気分だけ盛り上げようとしても、そのことだけに協力することはできないという声もある。現県民会館と

同様に利用できるなら、県内の文化芸術活動がより一層進んでいく。県民の気持ちを十分理解して進めるようお願いしたい。

- 次の世代をどう育てるかは、かなり危機的な状況である。芸術文化活動を担当する部署だけが取り組むべき問題ではなく、教育機関と文化を推進する側が連携しないと、形は出来ても中身は出来ない。子どもたちを舞台に出すには、教育委員会や学校の了解が無ければ出来ない。子どもたちは、自分達が持っている力を発表する場があれば、間違いなく頑張る。より幅広く活動を展開する上でも、学校の支援を含め、弾力的な取組をしていくことが、子どもたちを育成する上で必要だと思う。
- （回答）総合文化芸術館の使用料金については、条例で定める使用料金は上限であり、指定管理者が決まった段階で、これを上限として指定管理者が設定することになる。料金設定の考え方や、1階席（1,600席）のみ利用する場合は全館利用の場合より安い上限設定であること、練習室が各種あり、大ホールの舞台と同等の規模を持った練習室では、舞台での本番前に練習ができることなどの情報を更に発信していきたい。また、舞踊用の鏡を巡らせ弾力性のある床を備えたスタジオ、邦楽系の練習などにも適し、備品として畳を貸し出すことができる部屋などがあることについても、ホームページのほか、県の広報媒体などで発信していきたい。
- 条例と同様、計画の記載では、伝統芸能と伝承文化は分けてもらいたい。伝統芸能は、現在はプロが行っている能や歌舞伎、雅楽。いわゆる地域社会の保存団体等が継承しているのは伝承文化。
- 子どもの創造性等の育成については、例えば総合学習や放課後のクラブ活動など学校教育の中で、積極的に地域の文化、伝統芸能を長い目で見て育成していくことを、教育委員会との連携のひとつとして盛り込めないものか。
- 文化を活用した地域、観光、産業、経済の活性化は、政府の方向性とも合致する大事な部分だと思う。そのうち、「文化の活用による観光振興」は何か物足りない。文化と祭礼（祭）が一体化した取組は、全国にも沢山あるような気がする。例えば長井市の黒獅子まつりは、祭礼と芸能との一体化で来年30回を迎え盛上りを見せている。各県にはこのようなものが多くあるので、そういうものを盛り込めないか検討いただけないかと思う。
- 県の文化施設が載っているが、庄内には馴染みがない名前ばかりで、どこにある施設なのか、行ったこともない施設ばかりである。県内、さらに庄内地域には県立施設がどのぐらいありどのような活用がなされているのか知りたいと思った。
- 施設がどうしても山形市に集中している印象がある。それらの施設に足を運ぶことがほと

んどなく、どこにあるかもわからない。庄内地域の施設の名前があれば、庄内に住む人も、もう少し馴染みを持ち自分の事として見る事が出来るのではないかと思います。

- これだけ県の施設がありながら、利用したことがないという現実がある。小学生の頃など、子ども時代に体験させてもらう機会があれば、大人になってから、行ったことがあることを思い出して、子どもを連れていこうと思うようになるのだと思う。学校と連携して県の文化施設などを体験しに行くということに取り組むことも必要ではないか。庄内に住んでいると、庄内を越えて他の地域に行くということがない。鶴岡などは、庄内地域のものはとても詳しく様々なところを体験させてもらえるが、県内広くと考えると、体験が少ない感じがする。子どもたちが小中学校時代に県の施設を使える場を創出する工夫がもう少し盛り込まれば、庄内に住む者も馴染めるのではないかと思います。

- 先月ブラジルに行ってきた。日本人がブラジルへ移民して110年、山形県人でブラジルに渡った方の県人会の創立65周年ということで、民間の使節団(慶祝使節団)を作って行ってきた。
- ブラジルの移民資料館は、移民の歴史を展示する大きな資料館である。110年前に3ヶ月かけて船に乗って移住し、聞いていた話と現実は異なり、大変苦勞した日本人移民の方々。山形県から約6,000人渡っていることは、ほとんど知られていないと思う。県内ほとんどの市町村から移民として渡っている。現地にも300人くらいの県人会の方々がおおり、親交を深めてきた。行ってみないとわからないことがこんなにもあるのだということを感じた。日本人がどうやって渡ってきたのか、どんな苦勞をして現在の日系社会を築いたのか。資料館には、日本人や日系人が多く見学に来るのかと思っていましたが、そうではないようだった。ブラジルの方が家族で小学生の子ども2人を連れて見学に来ていた。学校の宿題の研究テーマが日本からの移民についてということで、移民資料館に来て学習しているとのことだった。山形県から約6,000人渡っていることすら知らなかった私にとって、現地の小学生が日系移民の事について学ぶことが学校教育の一環として行われていること、家族で、親子で一緒に来て勉強しようという姿勢、そういった自分たちの国、地域、アイデンティティを学ぼうとする姿勢にショックを受けてきた。
- 文化には色々定義があると思うが、まず自国を知る、地域を知る、それが基本であり、そのためには、色々な取組みの方向性があると思う。自分が生きてきた国、地域を知ることに関しては、日本の学校教育の中では、博物館や美術館へ見学に行くなどが行われており、授業として取り入れられていると感じている。むしろ大人の方が関心・知識が薄いのではないかと、ということに危機感を持っている。
- 旅行会社として色々なツアーを造成しているが、目立ってきているのが、若い人たちが歴史や文化に興味を持ち始めているというところ。例えば、歴女、刀剣女子、お城女子、縄文

女子など。若い人たちが地域の歴史文化、隠れた文化に強い関心を持っている。西川町の神社に関わらせてもらっているが、神社をあけると、参拝者の7割は若い人で、特に20～30代の男女である。こういったことをみても、若い人たちは自分達のアイデンティティに目が向いているのではないかと思うが、知識や意欲をもった若い人が社会に出て就職先で活かすことができる環境がまだ熟成されていないと思う。意識を持った人が、例えば、企業の中で業務に結びつけて商品化に関わってもらうなどの仕組みが県内企業には足りないのではないかと感じている。

- 「文化に親しむ環境づくり」の中に、県内企業の文化活動に対する支援・事業者による文化活動の促進という項目がある。参画の促進や支援ということでは、ぜひ企業として文化や域資源を利用、活用して商品化する、事業者として売り出していく、という活動に対しての具体的な施策、支援を構築していただきたい。具体的に作り上げていただく、それが県内企業に従事している方々の意識の改革にもつながるのではないかと考えている。
- 文化を活用した観光振興については、観光業界が観光というと、娯楽に結びつけられてしまいがちだが、観光は色々な資源を結び付け、具体的に動かすことが出来るものだと思っている。様々な文化を盛り込んだツアーの造成は常日頃から行い続けていきたいことだと考えているが、ツアーに参加する人がいなければ何の意味もない。参加しやすい環境、参加すべきという環境をぜひ具体的な施策として作り上げてほしい。企業活動の中には、社員の文化活動・意識の醸成も必要であり、こういったツアーに参加できる、あるいは企業として参加促進できるような仕組みを、具体的なものを盛り込んでいただきたいと考えている。
- 9月に開催した山形ビエンナーレの入場者数は65,000人と過去最多だった。前回より期間が3分の1になり、天候に恵まれなかったにもかかわらず、来場者は増えた。また、文翔館の歴史的景観と新しいアートやデザインのコラボレーションを企画した。北海道から九州まで、全国から来ていただいた。ボランティア数も280人の登録があり、過去最大となった。25～35歳くらいの年齢層の女性が大変多かった。予算は2,500万円で、補助金はいただかず、大学の実習予算と県内企業からの寄付金のみで開催し、身の丈の芸術祭としては、まずまずの成功だったと思う。
- 骨子案では、かなり細かいところまでフォローされているということで、方向性としては異論がない。全体のニーズを拾い上げることで、インフラとしては整備されると思うが、そのことで果たして現状を打開できるのかという疑問がある。
- 地方創生という意味では、課題が沢山あるのがチャンスだと思う。少子高齢化が問題視されているが、高齢者の方々がより生き生きと文化活動出来る仕組みを新たに作っていくチャンスかもしれない。人生100年時代の中で、もっと芸術活動をつなげて、山形ではこんな風に

文化を活かしていくんだという新たな施策やチャレンジが出来るかもしれない。

- 総合文化芸術館についても、これまでにない新しい運営のあり方や地域密着の仕方や全国への発信の仕方ということで、課題はあるが、その中でも、せっかく文化芸術の新しい計画だと思うので、革新性、新たなチャレンジ、創造性、山形として、新しくこういうことをやっていくんだということが伝わると思った。一方で、計画案をみると、過去のを伝えていくということの比重が大きいような気がしている。
- 子どもと高齢者、障がい者については、文言が多数見受けられるが、一方で若者や移住者、大学生などの若い人たちにあまり目が向いていないという気がする。今、地域文化に一番関心を持っている若い世代が芸術の鑑賞者として文化を生き生きと消費するということに対しては、実は開ききっていないと思った。大学で200人位に講義していても、その中で今年美術館やクラシック鑑賞にどれくらい行ったのか、ということにはあまり手が挙がらない。見たいものがない、東京でたくさんやっているが交通費がかかるなど、理由は色々ある。我々の力不足もあるが、担い手担い手と若い人にプレッシャーを与えるだけでなく、彼ら自身にも芸術を鑑賞させる機会や、あるいは芸術団体と大学が連携するなど、もう少し若者たちの活躍に視野を広げていただくこと。子どもたちの経験は芽が出るまでに時間がかかるため、今まさに地域志向が高まっている若い世代に直接的に取組に関わってもらおう仕組みづくりが必要ではないかと思う。
- UIターンは、クリエイティブな仕事をしている人ほど盛んに動くところがある。他県の地方創生の中で、ライター、カメラマン、デザイナー、Web、情報産業の人たち等、あまり地域性に縛られずに仕事出来る人たちを施策にうまく取り込んで、活躍してもらっているケースがある。山形ビエンナーレで東京で説明会をすると、山形出身で東京で働いている人が結構来る。山形に住んでいる人だけでなく、山形に縁がある人なども含めてもう少し幅広く山形のこういった創造的な活動に参加できるような、また、クリエイティブクラスといわれているような人たちの移住促進など、知的労働に従事する人の受け皿としての場を作っていくことが出来ないかと思った。
- 様々な取組を皆で一緒に取り組んでいこうという何かしらのスローガン、あるいは山形学フォーラムのように、何か、教育やまちづくりというものに県を挙げて一種のプロジェクト化して、そこに外部、内部、若者、高校生、お年寄りなどを巻き込んで、皆で盛り上げるような名物プログラムだったり、名物プロジェクトだったりが必要だと思う。
- 総合文化芸術館のホールをどうするかということについてもリーダーシップが必要だと思う。皆が乗られる船というか、枠組みがないと、細かいニーズばかり出てきて、皆がワクワクしない。ワクワクしないと、文化芸術も活性化しないので、何かしら皆が活動するための大きなスキームが必要だと思う。プロジェクトにはソフト面だけでなく、コミュニティの

活動拠点のようなものが必要で、地域づくりが成功している市町村を見ると、必ず文化芸術のためのコミュニティがある。そこから色々なものが草の根的に生まれてきている。

- 山形では旧公民館がコミュニティセンターと名前を変えているだけ。文化芸術のためのコミュニティの活躍を生み出す場が山形には全くない。いくら市民市民といっても、芸術団体や大学等だけの声になってしまい、本当の意味での市民のニーズが聞こえてこない。そういう場ができれば、非常にいいと思う。
- 新しい文化芸術を山形で訴えるとき、山形はこういうことを大事にしているという顕彰の部分で、齋藤茂吉の賞があるが、例えば京都市では、京都市美術文化賞がある。工芸やアートや伝統能等の担い手など、若い人に対して顕彰する制度を設けている。そういった賞をつくって、力のある人を私たちが認めて応援することにより、若い世代の子どもたちもこういう人がいるんだと、憧れの対象になったり、そういうものを作っていけるのではないかと思う。非常に構想的かもしれないが、状況が変わってくるかもしれない。
- 山形ビエンナーレと一緒にやっている絵本作家の方は、児童文学のノーベル賞といわれる賞を受賞されているが、県として顕彰されたことはこれまでなかったようだし、浜田広介もいる。例えば児童文学賞のような、子ども、美術、地域といったところで包括できるような顕彰制度をつくるだけで、山形の文化活動の色彩が変わってくるのではないかと思う。
- 今年6月に成立した「障がい者による文化芸術活動推進に関する法律」は、超党派の議員発議で制定されたとのこと。「ボーダレスアート展2018」は、文翔館で開催し県からも助言いただいたり、発信の機会をいただいたということで、恵まれた時期になってきているのだと思う。一方で、20年来障がい者と関わって素晴らしい作品に出会い、それを発信していく支援者として感じていることは、障がい者・高齢者ということで、分離分断してしまうのではないかという心配である。
- 以前、イタリアのベネチアで行われたビエンナーレで、来場者が一番目にするであろう場所に日本の作家の作品が飾られた。作家は重度の自閉症の方だったが、キャプション等の作家紹介には障がいという文言はひとつもなかった。素晴らしいことは素晴らしいんだというところの多様性を理解できている主催者であり、国民の文化の中にあるとすると、私の夢でもあるが、この国もそうあってほしいと思う。入り口として法整備をしていく、条例を通じで色々なことをインフラとして整備していくということはとても大事だと思うが、将来的に分断や差別につながらないような形にもっていかなければならないと思っている。
- 障がい者の支援者の立場としていつも肝に命じていることは、障がい者差別をしているのは一番は支援者だという言葉。それを一番肝に銘じて、支援者関係者は一番彼らのそういう社会参加を足踏みさせているのではないかということも、常に立ち返って考えていきたいと

思っている。

- 文化に関する情報が届いていないと感じている県民が約4割いるという報告があった。障がい者はマイノリティなので、この10分の1も情報は届いていないのではないかと思う。推進センターとして力を入れているのは県内の巡回展。12月から新庄と、鶴岡で行いたいと思っている。県内各地で障がい者の作品を見ていただく機会、触れていただく機会を積極的につくっていききたい。
- 発掘事業にも少し力を入れている。一般校も含めて特別支援学校、学級等で障がいをもったお子さんたちが学校教育の一環として創作活動をしている。ある特別支援学校のオープンスクールに相談支援事業者という立場で出向いたとき、クラスの片隅に目を奪われるような素晴らしい作品があった。そういう作品に出会うと、先生から作家と作品ができるプロセスの話をついたり、ご家族に会ったりしている。
- 優れた作品が埋もれているのだと思う。学校教育の中では、障がい者の作品をどこかで治療や教育という視点でしか捉えていないと少し感じる。純粋に素晴らしい作品が生まれたり、物が作り出されているという現場が実際に教育の場にあった。これは病院や施設にもいえることだが、そういうところに造詣の深い先生方もいらっしゃるのので、各地域に出向いて、相談機関があることや、悩みがあればアドバイスできるということも、条例を通して位置づけをしていただけるといいのかなと思っている。
- 「障がい者による文化芸術活動推進に関する法律」では、障がい者の作品の権利保護についても定められている。自分の経験として、パリの美術館に、当時私が勤務していた施設の作家の方の作品の出展依頼があった。その方は重度の障がいをもった方だったが、美術館との契約行為ができずに、出展をとりやめた。そのとき、成年後見制度で代理人をきちんと立てることが必要だったが、ご家族からの理解が得られず、出展できなかった。そういった作品が、今後一人歩きをして、勝手に何かのモチーフで製品化されてしまったということがないように、きちっと守っていくという視点も必要と感じている。
- まだまだ理解が進んでいない状況だということも感じているので、まずは障がい者の作品ということで、私どももいろいろPRしていくが、まずは触れ合っていただく体験型の講座、ワークショップなどで、障がい者と地域のお子さんたちに自然な触れ合いが生まれるような取組をきめ細かく県内各地域ですすむよう、障がい者芸術活動推進支援センターの事業をより活性化していく必要があると感じている。
- 山形の製造業も非常にレベルが高くなり、マザー工場が多く出来き、世界中から人が来ている。ところが、工業高校にしても大学にしても、就職問題が影響する。山形に残ってくれば山形の生産流通もますます高くなる。要は子どもたちに現場を教えなければならないと

いうことを痛切に感じる。

- 教育庁との連携については、先取りしていったほうがいいのではないかと思う。文化施設の連携や文化財の保護などについても、県がもっとサポートした方が良くのではないか。
- 文化施設は、必ず赤字になる。それを怖がってはマネジメントできない。マネジメントできる体制等を早めに作った方がいいと思う。
- 山形県は東北で最も国宝・重要文化財が多い県。そういう前提で文化財施策をすすめていただきたい。